

大学保健体育科目のあり方に関する研究

— その2 愛知教育大学保健体育理論受講学生に対するアンケート調査から —

愛知教育大学	体育教室	合屋	十四秋
愛知教育大学	体育教室	天野	義裕
愛知教育大学	体育教室	小笠原	サチ子
愛知教育大学	体育教室	坂田	利弘
愛知教育大学	体育教室	丸地	八潮
愛知教育大学	体育教室	岡出	美則

On the Physical Education Praxis at University (II)

Department of Health and Physical Education Toshiaki GOYA
Department of Health and Physical Education Yoshihiro AMANO
Department of Health and Physical Education Sachiko OGASAWARA
Department of Health and Physical Education Toshihiro SAKATA
Department of Health and Physical Education Yashio MARUCHI
Department of Health and Physical Education Yoshinori OKADE

I. はじめに

この研究の「-その1-」は、本研究報告第17号に「保健体育実技」に関するアンケート調査の分析・検討を行って報告した。今回は、「保健体育理論」に対する意識調査の結果を分析・検討して報告するものである。

保健体育理論と実技の関係については、旧設置基準において、「保健体育科目については、講義及び実技四単位」(第32条)とあって、講義・実技の重みづけは示されていない。しかし、本学においてはそれを、「保健体育実技2単位、保健体育理論2単位」(愛知教育大学教育課程実施要領別表5)とおさえてきた。なお、本学の保健体育科目の具体的展開は他の大学のそれとは大変異なっているため、先ずそのことの確認が必要であろう。

本学の保健体育科目は、「実技」と「理論」が90分の枠の中で通年(30回の授業)で行われて、

それぞれ1単位となる。30回の前半 $3/4=22.5$ 回が実技、後半の $1/4=7.5$ 回が理論である。この法的根拠は、実習・実技1単位 $=45分 \times 3 \times 15回=2025分$ と本学の方法の $90分 \times 22.5=2025分$ と見合うことにある。また、理論:講義1単位 $=45分 \times 15回=675分$ と $90分 \times 7.5回=675分$ が同じことである。このことは外国語科目や一般教育科目との時間割編成上の必要性和、実技との関わりを少しでも長期にと願う気持ちが一致して実現した方法である。したがって、「理論」は1年次の後半7.5時間と2年次の後半7.5時間の受講で2単位となる。

さて、「理論」の内容は、保健体育理論は講義形式で2単位とおさえて来た関係で、以前からテキストによって講義されてきた。昭和35年「体育の理論」、昭和42年からは3訂された「保健と体育の理論」、昭和54年から「健康と運動の理論」、そして現在用いられている昭和63年版の「現代生活と健康・スポーツ」と時に応じて内容構成を変

えながら現在に至っている。現在のテキストの内容を大きく2分すると、健康・体育・スポーツにかかわる人文社会科学的内容と自然科学的内容である。Ph理論Iの授業内容は前者であり、IIは後者の内容となる。

本学の保健体育理論は、以上の経過を経て今日に至っている。しかし、今回の「設置基準」にあっては、特に科目・単位等が示されていないだけに、本学の保健体育科目設置の意義・目的に応じた理論と実技の関係性・重みづけ、目標・ねらい、内容、方法などが検討されねばならない。すでに「実技」の検討はされてきたので、今回の「理論」のあり方の検討と重ねて保健体育科目全体のあり方が明確になればと考えている。

II. 目的

本研究は、現在行われている保健体育理論（講義）を受講した学生が、その授業に対してどのように感じているのかを明らかにすることによって、今後の本学保健体育理論（以後「理論」とする）のあり方を検討すると同時に、「実技」「理論」を含む全体のあり方をも検討しようとするものである。その手がかりは、先の報告に示した愛知教育大学保健体育科目に関する構想モデル¹⁾(図1)にある。

それは、「生涯にわたり、健康で文化的なスポーツ活動を営める主体者形成」に本学の保健体育科目の目標を求め、「それに必要な教養、実践的能力を、健康に関する科学やスポーツに関する科学の成果を踏まえて保証していく」ことを確認したものであった。いわば、「からだ」への関心とコントロール能力という側面と運動・実践を推進する原動力となる情動の面が、健康・体力・運動文化にかかわる活動・実践を通して止揚されることによって健康・スポーツへの生涯学習が自己のものとして展開されると考えているのである。そして、その止揚は、「生活化、習慣化への働きかけとそれに必要な場」と「コミュニケーションの場」が用意されており、しかも「認識・運動(実践)・組織」の各領域が目標達成に向けて構造的に組み立てられているような学習・指導過程において実

現されると考えられる。

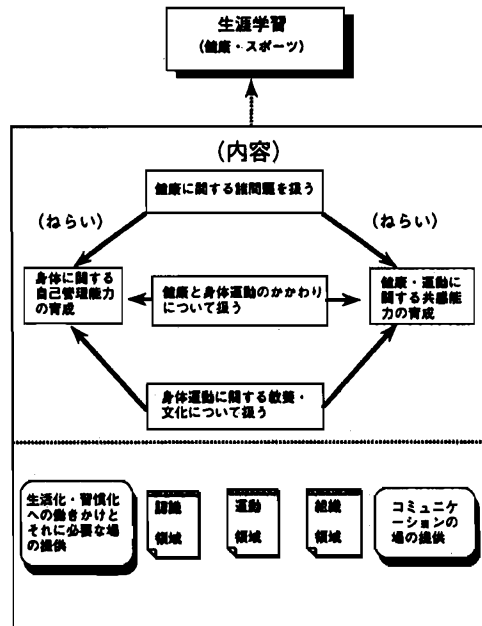


図1 愛知教育大学の保健体育科目に関する構想モデル

このような構想における「理論」の位置づけは、必ずしも明確ではない。しかし、少なくとも、現在の「理論」が学生にどのように受け止められているのかを明らかにし、その上に立って実技・理論を含む全体のあり方を論じるべきであろう。また、その際には、体育や保健に関する理論は、学習指導要領では中学校・高等学校において学習することとなっているが、実際にはどの程度授業がなされているのかを予め知る必要があると考えた。そのことは、大学での理論受講に何らかの影響力をもつと思えるからである。その結果は表1のようであった。すなわち、59%の者が保健・体育両方の理論の授業をうけていること、36%は保健のみ、受けなかったものが2.5%、無回答1.1%、体育理論のみ1.4%であった。いうならば、保健の授業は95%の者が、体育の理論は60%の者が授業を受けていることが明らかになった。このような経験をもつ対象者の回答であることの認識にたつて分析・検討する必要が確認された。

本研究は、以上の点を踏まえ、本学における保健体育科目のあり方、特に保健体育理論のあり方

を中心に、目標・ねらいの設定、内容・方法の確立に向けて、当該授業の受講学生へのアンケート調査の内容を分析し検討することを第一のねらいとし、さらにできうれば、保健体育科目全体のあり方を明らかにしようとするものである。

表1 高校での保健体育理論の内容

内容	回答数	パーセント
無回答	14	1.3
体育理論のみ受講	18	1.4
保健理論のみ受講	453	36.4
両方受講	728	58.2
受けなかった	31	2.5

III. 方 法

1. 調査対象および標本

調査対象は1991年度の本学Ph理論I、II（1・2年必修）を受講した学生であった。調査標本は、再履修の3・4年生を含めた合計1245名の有効回答であった。表2に標本数の内訳を示した。

表2 標本数 (人数)

学年	全体	男子	女子
全体	1245	496	749
理論 I受講者	924	371	553
理論 II受講者	321	125	196

2. 調査方法

今回の調査は、①「はい」、「いいえ」、「どちらでもない」の選択肢による質問、②授業形式に対する記入方式、③テキストの興味あるテーマに対する複数選択肢および④自由記述によった。アン

ケート項目は、資料1に記載した項目であった。自由記述は、1)授業に満足したその他の理由、2)開講して欲しいテーマ、3)受講後の全体を通しての感想の3つであった。集計は、選択肢については単純集計し、自由記述についてはキーワードで分類を行った。分類方法としては、カードにキーワード化した語句をいくつかに分けて転記、類別し、出現したキーワードの度数を単純集計した。

調査結果は、学年別(Ph理論I、II)に分類し、その度数を集計してパーセントに換算した。

IV 結果と考察

その1 「選択肢」について

図2にPh理論についての全学年の調査結果を示した。

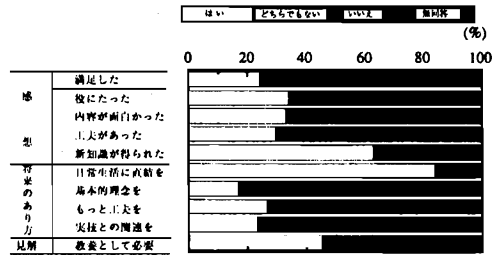


図2 Ph理論受講後の感想、意見 (1・2年男女合計=1245)

アンケートの内容は、受講後の感想、将来のあり方、Ph理論に対する見解にわけられるが、受講後の感想においては、25%が満足をしたと答え、どちらでもない・無回答が30%、いいえが45%であった。しかし内容については、新知識が得られた60%、役に立った38%、内容がおもしろかった37%という意見も多く、満足のいかなかった理由について、内容によるものか、具体的な開講方法等に問題があるのかはここでは明らかではない。

将来のあり方については、日常生活と直結した内容を求めるものが80%、もっと工夫をという意見が28%、基本的理念について希望するものは18%であった。又50%の学生がPh理論は教養として必要な科目であると考えている。

Ph 理論 I 受講生は人文社会科学系, II 受講生は自然科学系の内容を受講するが、『選択肢』について I・II 受講生のアンケートを比較考察した結果, ほぼ同じ様な傾向が見られた。

Ph 理論 I 受講生よりも II 受講生において肯定的意見の割合が高かったのは以下の項目であった。

【役に立った】20%

【満足した, 内容がおもしろい, 新知識が得られた】10%

その 2-1 「満足感」について

表 3 は, 受講後に満足したかどうかについてその理由を自由記述させたものである。その結果は, 8 項目に類別できた。

「肯定的記述」では, 「楽しい・面白い・充実(度数: 16)」「役立つ内容(度数: 7)」「興味ある内容(度数: 6)」の順であった。

一方, 「否定的記述」では, 「つまらない(度数: 10)」「興味ある内容でなかった(度数: 8)」「時間・回数不足(度数: 7)」の順であった。全体的に自由記述の回答を見ると, 肯定, 否定ともほぼ同数に近い回答であった。

これらのことは, 日常的な学生の興味・関心の把握と, 開講方法や授業展開の工夫等について再検討を示唆している。

表 3 「満足感」について
(数値: キーワード頻度数)

肯定的記述 (N=51)		否定的記述 (N=53)	
①楽しい, 面白い, 充実	16	①つまらない・楽しくない	10
②役立つ内容	7	②興味ある内容でない	8
③興味ある内容	6	③時間・回数不足	7
④教師・先生がよかった	5	④授業展開	5
⑤学習形態・方法	4	⑤内容が浅い, 広い	5
⑥身近でわかりやすい内容	4	⑥わからなかった	4
⑦新しい知識	4	⑦その他	14
⑧その他	5		

[注: キーワード総数104]

その 2-2 開講方法について

現在 Ph 理論は, 講義時間: 90分, 回数: 7, 8 回, 受講者数: 70名内外, Ph 理論 I・II 必修で行われている。授業形態については, 講義, 演習, 実習形式等があげられるが, 開講方法をもっと工夫してほしいという問いに対する結果は図 2 に示

されるとおりであった。講義時間: 約60分, 受講者数: 30~60名が適切であると, 授業形態については実習形式が33%, 講義形式が38%となり, 少人数での, 日常生活, 実技と直結した Ph 理論の開講を望んでいる。必修か選択かの問いについては, 選択として45%, 必修として30%, 双方22%という結果であった。

開講方法に対する受講生 I, II の意見を比較すると, II 受講生が少人数の体制を希望し, 授業形態については, I 受講生において講義形式を希望するものが II 受講生よりも10%高い割合を示した。又, 【実技と理論を関連をもたせて通年で受講したい】【一般体育は必修として必要】という要望が II 受講生が I 受講生よりも10%高かった。

その 2-3 「興味あるテーマ」について

表 4 は, Ph 理論 I, II を受講した結果, テキストに掲げられたテーマの範囲内で興味あるテーマとして回答した項目を, それぞれ多い順に50%以上, 40%以上, 30%以上に分けて集計したものである。

まず, I 受講生では「エイズ問題」, 「アルコール」, 「イメージトレーニング」, 「成人病問題」との順であった。II 受講生では, 「エイズ問題」, 「成人病問題」, 「子どもの遊びと運動生活」, 「イメージトレーニング」, 「リーダーシップ」の順であった。両学年とも「エイズ問題」がトップで, この問題に対する関心の高さが伺われた。

一方, 内容別では, 体育的内容で, イメージトレーニングが最も多く, 次いで「スポーツの心理」, 「運動と栄養」, 「子どもの遊びと運動生活」の順であった。これに対して, 最も低率だったのは, 「国体のあゆみ」であった。保健的内容では, 「エイズ問題」が最も高率であり, テキストの全学習項目のうちでも, 最も多かった。全体的に, 体育的内容より保健的内容の方が関心が高い傾向が見られた。

その 2-4 「開講してほしいテーマ」について

本学のテキストの学習内容以外に開講してほしいテーマを上げてもらった結果, 最も関心が高いテーマは, 「性教育」, 「テーピング(実習を含む)」

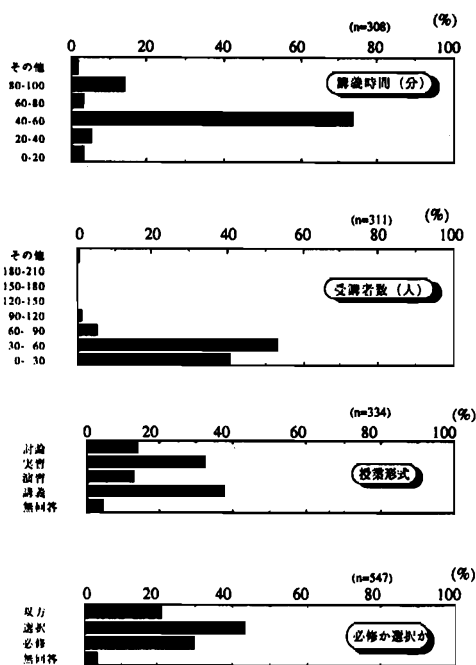


図3 開講方法に対する要望

表4 「興味あるテーマ」について

理論I (N=924)	理論II (N=292)
50%以上 ・エイズ問題	50%以上 ・エイズ問題 ・成人病問題
40%以上 ・アルコール ・イメージトレーニング ・成人病問題	40%以上 ・子どもの遊びと運動生活 ・スポーツの心理 ・イメージトレーニング ・喫煙 ・肥満 ・アルコール ・思春期・青年期メンタルヘルス
30%以上 ・思春期・青年期のメンタルヘルス ・肥満 ・喫煙 ・スポーツにおける心理 ・成人期のメンタルヘルス ・子どもの健康をどう「育てる」か	30%以上 ・女性スポーツ・障害者のスポーツ ・スポーツと性格 ・成人期のメンタルヘルス ・子どもの健康をどう「育てる」か ・運動と栄養 ・運動事故と安全対策 ・遊びとは何か ・健康とは何か ・子どもの健康をどう「守る」か ・リーダーシップと集団技能

【注：表中の項目は、%の高い順に並べている】

であった。そのほか、変わったテーマとしては、「スポーツとトトカルチャ」「スポーツと武道」、「妊娠中のスポーツ」、「過労死」、「尊厳死」などであった。いずれも、現代的な問題であった。

しかし、今回の調査では、回答数が少なかったもので、さらに検討を進めていく必要がある。

その3 「全体自由記述」について

自由記述に回答を寄せた学生は、839名で67.4%の高回答率であった。集計は、前節の自由記述と同様にキーワードによって類別し、その頻度によった。キーワード記述の延べ総数は、1153であり、1人あたり0.93の回答であった。

記述内容は、次の3点に大きく類別できた。

1. Ph理論を肯定する記述 (項目数: 10) (度数合計: 526)
2. Ph理論を否定する記述 (項目数: 10) (度数合計: 350)
3. 要望・意見に関する記述 (項目数: 7) (度数合計: 277)

「肯定的記述数」と「否定的記述数」の延べ総数に対する割合を比較すると、肯定数は否定数のほぼ1.5倍あった。

図4に肯定的意見、図5に否定的意見の各学年別比較 (Ph理論I, II) の結果を示した。また、図6に要望、意見の各学年別比較の結果を示した。学年別比較は授業内容の取り扱いが学年によって違うためである。

1) 「Ph理論を肯定する記述」

内容は10項目に類別できた。このうち、多数回答は理論Iでは「①授業形態、方法、内容がよかった23.8% (度数: 65)」、「②新知識が得られた16.1% (度数: 44)」、「③おもしろい、よかった13.9% (度数: 38)」、「④興味ある内容12.5% (度数: 34)」、「⑤これまでとは異なった内容10.6% (度数: 29)」などの順となった。これは、高校までの学習とは異なった大学での授業形態や、内容によって、新しい知識を身につけたことを示唆している。一方、理論IIでは、「①興味ある内容18.2% (度数: 46)」、「②日常生活と密着17.0% (度数: 43)」、「③役に立つ内容12.3% (度数: 31)」、「④新知識が得られた10.3% (度数: 26)」などの順となった。これは授業の内容が学生の日常生活に密着した実学的かつ実践的であり、興味ある内容が題材として用いられたと考えられる。また、少数 (約3~4%) ではあるが、「理論的、科学的な内容」であったとの回答も得られた。

以上のことから、Ph理論は授業方法や内容の取り扱いによって大きく変動することが示唆された。

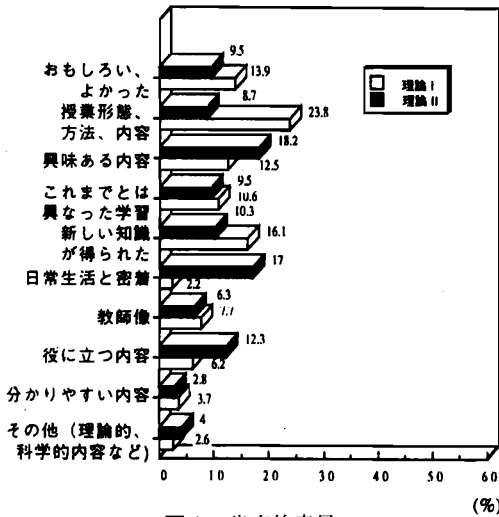


図4 肯定的意見

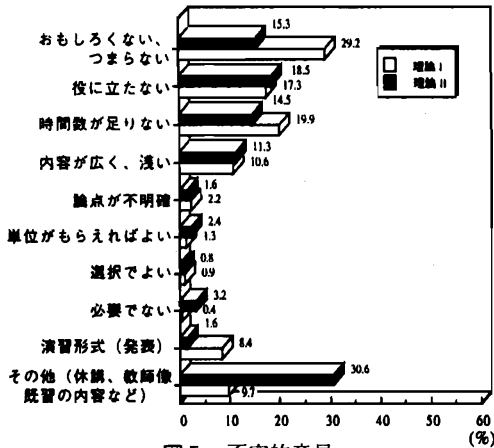


図5 否定的意見

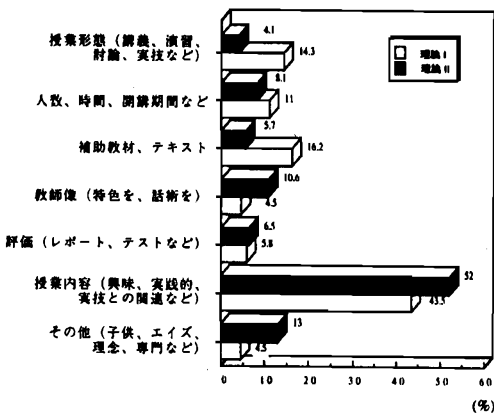


図6 要望

2) 「Ph理論を否定する記述」

内容は10項目に類別できた。理論Iでは「①おもしろくない、つまらない29.2% (度数: 66)」、 「②時間数が足りない19.9% (度数: 45)」、 「③役に立たない17.3% (度数: 39)」、 「④内容が広く浅い10.6% (度数: 24)」などであった。理論IIでは「①既習の内容、教師像、休講など30.6% (度数: 38)」、 「②役に立たない18.5% (度数: 23)」、 「③おもしろくない15.3% (度数: 19)」、 「④時間数が足りない14.5% (度数: 18)」などであった。

以上のことから、双方ともに通常の半期の講義時数 (平均授業回数90分×15回) に比べその半分の授業開講期間 (90分×7.5回) しかないため、時間数不足と感じさせ、内容が広く、浅い印象となったと思われる。また既に習ったことの繰り返し、役に立たなかったことなどは、Ph理論に対して内容の取り扱いの再考を求めていることが示唆された。

一方、肯定数と否定数の合計に対する肯定数の割合は、1年が54.7%、2年が67.1%であり、2年が1年を10%程度上回っていた。同様に、否定数の割合はそれぞれ45.3%、32.9%であり、2年が1年を10%程度下回る結果となった。すなわち、学生のPh理論に対する反応、関心は人文社会科学的内容よりも、自然科学的内容の方がやや上回る結果となった。

3) 「要望・意見に関すること」

内容は、7項目に類別できた。この中、多数回答は、理論I、IIともに「①授業内容」に関する要望がそれぞれ43.5% (度数: 67)、52.0% (度数: 64)であり、ほぼ半数を占めた。これは選択肢の満足のいかなかった回答を反映した結果となった。続いて理論Iでは「②補助教材、テキスト16.2% (度数: 25)」「③授業形態14.3% (度数: 22)」「④人数、時間、開講期間など11.0% (度数: 17)」の順であった。一方、理論IIでは「②子供、エイズ、専門的な内容など13.0% (度数: 16)」、 「③教師像10.6% (度数: 13)」「④人数、時間、開講期間など8.1% (度数: 10)」の順であった。

以上理論I、IIの2位以下の要望をまとめると、授業方法に関する内容がほとんどであった。この

ことは具体的な課題に対する授業者側の点検を促すものであり、今後再検討する必要性が指摘された。

V まとめ

本学 Ph 理論 I・II を受講した学生1245名を対象にして Ph 理論についてアンケート調査を実施し、次のまとめを得た。

1. 受講後の感想では、満足した者（25％）が、不満足であった者（45％）より少なかったが、新知識が得られたとする者は62％あった。
2. 今後の Ph 理論の内容として、日常生活に直結したものを望む者が80％あり、基本的理念について望む者は18％と少なかった。
3. Ph 理論の必要性については、必要とする者（45％）が不必要とする者（30％）を上回った。また、自由記述項目数からみても、Ph を肯定する意見（526度数）が、否定する意見（350度数）を上回った。
4. 授業形式では、時間は40～60分程度、人数は30～60名程度、討論や演習形式よりも講義形式を望み、必修とするよりも選択を望む者の方が多かった。
5. 興味あるテーマとしては、体育的内容ではスポーツ実践における精神面（イメージトレーニング）に興味があり、保健的内容では時代を反映した健康問題（エイズ・成人病問題）に関心を示した。
6. 以上の結果を先のモデルプランに照らすと、Ph 理論の内容として、健康に関する諸問題は重要な事柄であり、これは学生の興味あるテーマと一致することが示唆された。しかし、認識領域において新知識が得られているものの、生活化・習慣化にまで結びついて役立つところまで至っていないことが示唆された。

これらのことから、今後、Ph 理論の内容・方法についてさらなる検討を加え、学生の満足のいく授業となるよう工夫が迫られていることが明らかになった。

（1993年11月8日受理）

引用・参考文献

- 1) 合屋十四秋他（1993）、「大学保健体育科目のあり方に関する研究—その1 愛知教育大学一般体育実技受講学生に対するアンケート調査から」、愛知教育大学教科教育センター研究報告，17：143-50